

2026年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2026年8月～12月)のポイント

海況

黒潮はN型^(※1) 基調で推移するが、9月までは一時的にB型^(※1) またはC型^(※1) となる。

沿岸水温は、潮岬以西は「平年並」^(※2) ～「極めて高め」^(※2)、熊野灘は「低め」^(※2) ～「高め」^(※2)、遠州灘～相模湾は「やや低め」^(※2) ～「やや高め」^(※2) で暖水波及時に「やや高め」～「極めて高め」、伊豆諸島海域は「やや高め」～「極めて高め」で一時的に「極めて低め」^(※2) ～「やや低め」、房総～常盤南部海域は「やや低め」～「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

N型：八丈島の北を通過、南端が北緯33度以北

B型：八丈島の北を通過、南端が北緯33度以南

C型：八丈島の南を通過

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、

やや高め・やや低め＝平年値±1.0℃程度、

高め・低め＝平年値±1.5℃程度、

極めて高め・極めて低め＝平年値±2.5℃以上、

ただし、鹿島灘～常盤南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

紀伊水道外域以西では前年を上回るが、熊野灘以東では前年を大きく下回る。全体としては前年を大きく下回る。

カタクチイワシ

相模湾以西では引き続き低水準、房総海域以北では前年を上回る。

ウルメイワシ

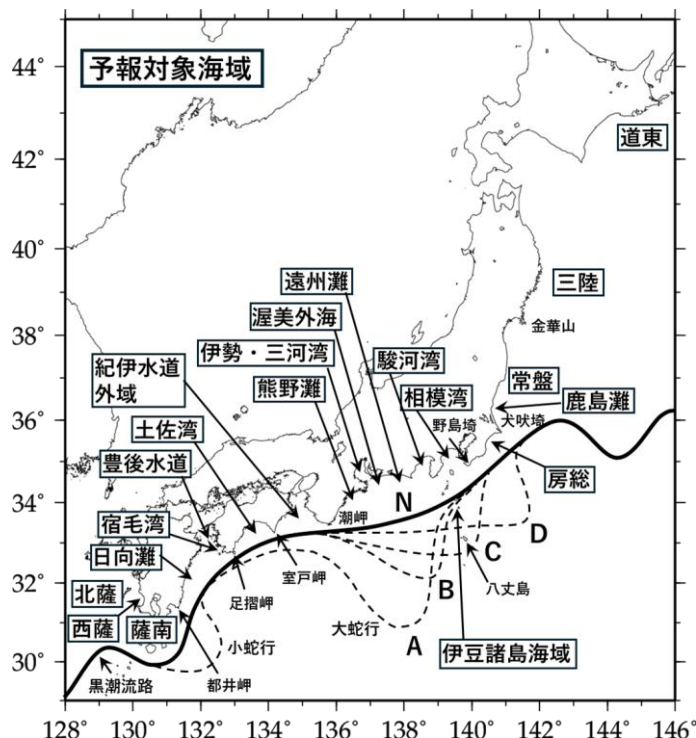
海域によって異なるが、全体としては前年並。

マアジ

前年を下回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバ、ゴマサバともに低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当

漁況：浮魚資源部（横浜） 大島、伊澤、木下、日野、木皿、由上、上村

海況：海洋環境部（横浜） 瀬藤、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2026年8月～12月）

(1) 黒 潮 （注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、9月までは接岸傾向で推移し、その後は離岸傾向となる。
- ・足摺岬～室戸岬沖では、接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸する。
- ・潮岬沖では、接岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・N型基調で推移するが、9月までは一時的にB型またはC型となる。
- ・遠州灘沖では、接岸傾向で推移する。
- ・9月までは一時的に八丈島の南側を通過する。
- ・房総沖では、擾乱の東進に伴い一時的に離岸する。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬沖では、一時的に黒潮系暖水が波及する。
- ・足摺岬～潮岬沖では、断続的に黒潮系暖水が波及する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水域となるが、C型時には冷水域に覆われる。
- ・房総沖は、断続的に黒潮系暖水の影響がみられる。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・9月までは冷水域に覆われやすいが、その後は断続的に黒潮系暖水の影響がみられる。

(4) 沿岸水温

- ・薩南では、「高め」～「極めて高め」で推移する。
- ・日向灘～紀伊水道外域は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘では、「低め」～「高め」で推移する。
- ・遠州灘～相模湾は、「やや低め」～「やや高め」で推移し、暖水波及時には「やや高め」～「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「やや高め」～「極めて高め」で推移し、C型時には「極めて低め」～「やや低め」となる。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「やや低め」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2026 年 3 月～2026 年 7 月） （注：経過は図 2 を参照のこと）

（1）黒 潮

- ・ 3 月～4 月上旬にかけて B 型基調で推移し、その後は N 型で推移した。
- ・ 3 月に、B 型と D 型を重ね合わせた流型がみられた。
- ・ 2 月に発生した小蛇行は、5 月まで九州南東沖で停滞した。6 月以降に東方に伝播したが、徐々に衰退し 7 月下旬に紀伊水道沖で消失した。

（2）薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、3 月から 6 月かけて「平均的な位置」で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、3 月上旬は接岸傾向であった。3 月中旬～7 月上旬は離岸傾向で推移したが、7 月中旬以降は接岸傾向に転じた。
- ・ 足摺岬では、小蛇行の影響で 4 月上旬に一時的に離岸したが、6 月上旬までは接岸傾向で推移した。6 月中旬～7 月中旬は離岸傾向で推移したが、7 月下旬以降は接岸に転じた。
- ・ 室戸岬～潮岬沖では接岸傾向で推移した。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘～相模湾では、断続的に黒潮系暖水が波及した。
- ・ 3 月中旬、黒潮は一時的に八丈島の南側を通過した。
- ・ 野島埼～犬吠埼沖では、3 月は離岸傾向で推移し、その後は接岸傾向で推移した。

（3）鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響がみられたが、6 月以降は北から徐々に冷水域に覆われた。

現 況（2026 年 7 月 29 日現在）

（1）黒 潮

- ・ N 型流路である。

（2）薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 都井岬～潮岬沖で接岸している。

◎潮岬以東

- ・ 伊豆諸島北部海域は、冷水に覆われている。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、暖水に覆われている。
- ・ 房総沖で接岸している。

（3）鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 冷水に覆われている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、都井岬沖～御前崎沖では川合（1972;海洋物理Ⅱ、東海大学出版会）、野島埼沖と犬吠埼沖では清水（1989;千葉水試研報）に準じた。

※ 黒潮流型の分類は、吉田ほか（2006;海の研究）に準じ、さらに詳細な分類には海上保安庁の定義（<https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/exp/yougo.html>）を補助的に用いた。

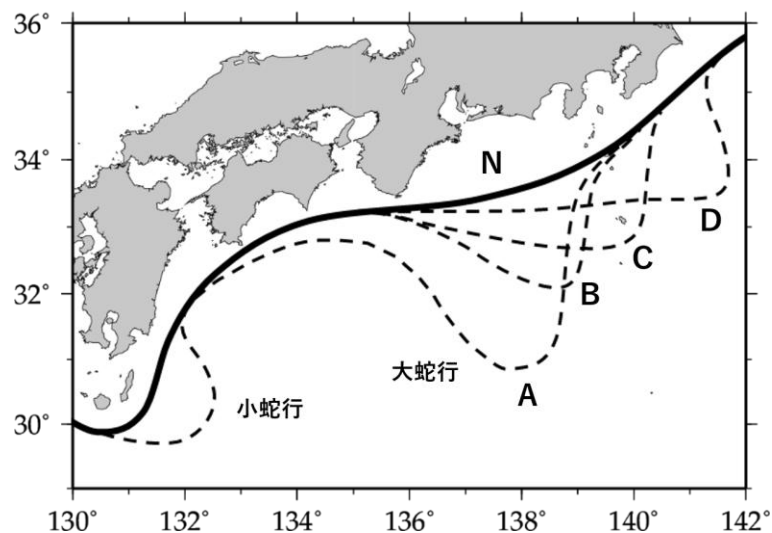


図 1 黒潮流型の分類

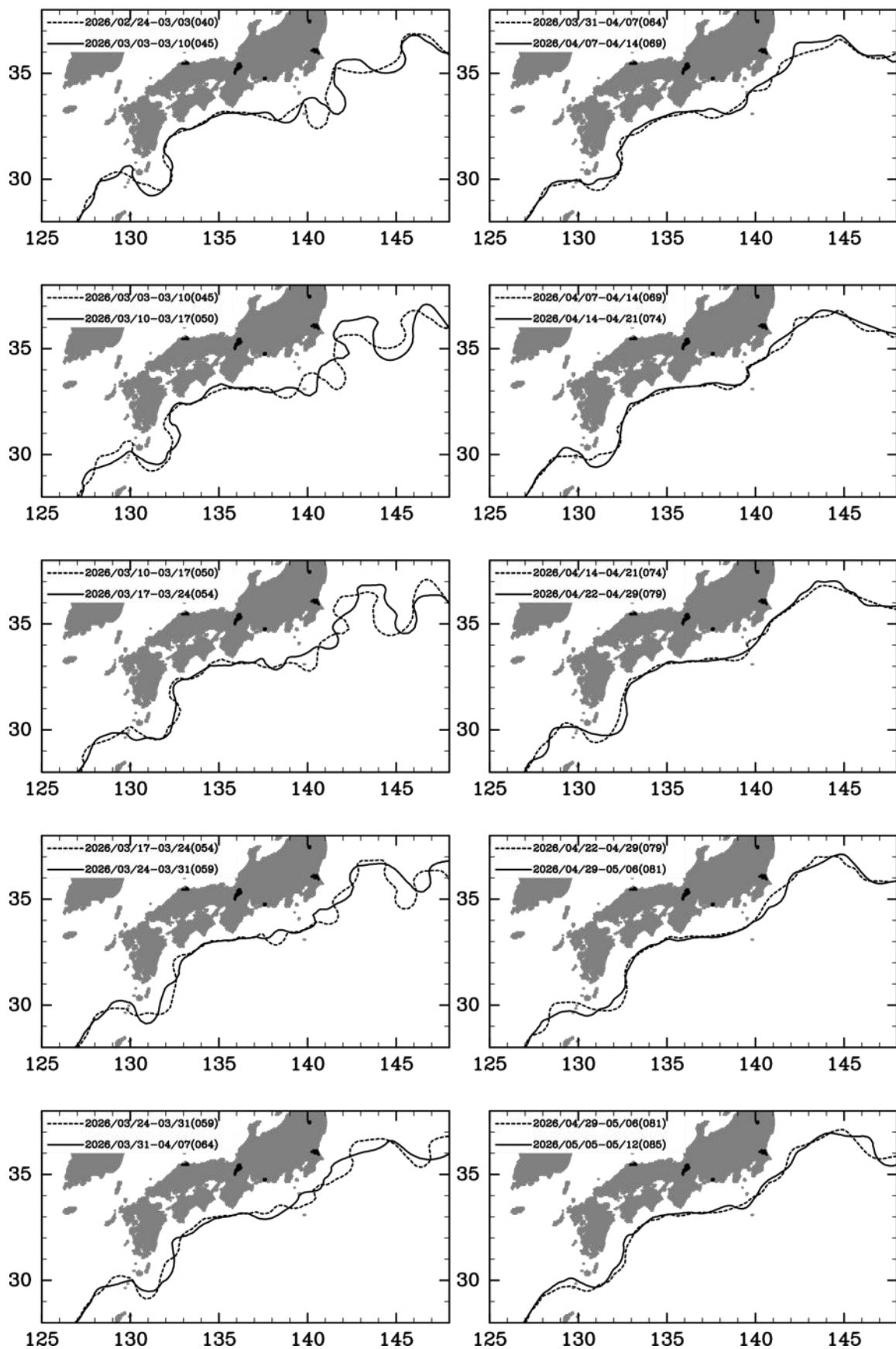


図2 黒潮流軸のパターン

(2026年3月～5月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

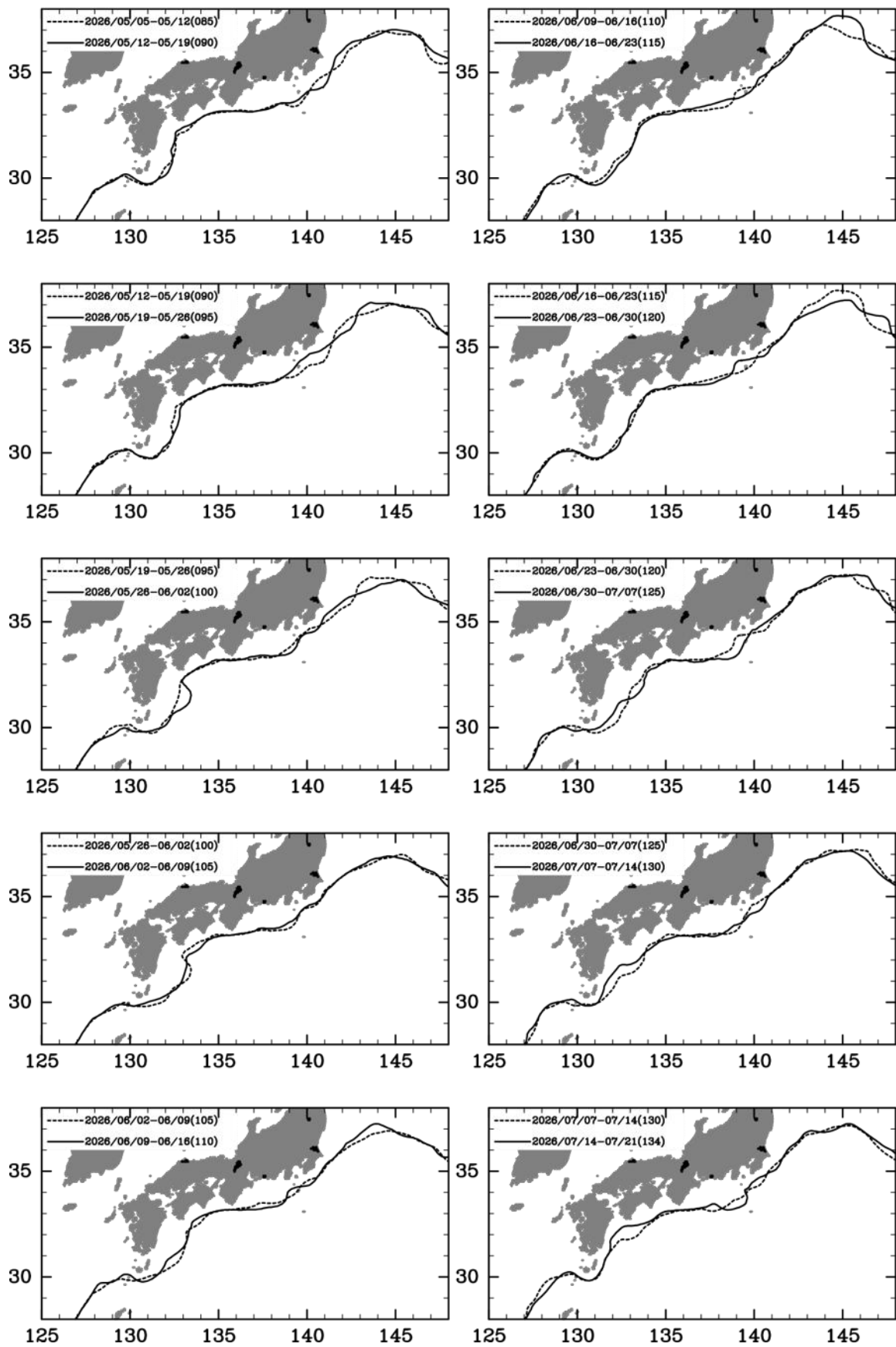


図 2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2026 年 5 月～7 月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026 年 8 月～12 月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0 歳魚（2026 年級群）、1 歳魚（2025 年級群）、2 歳魚（2024 年級群）、3 歳魚（2023 年級群）、4 歳以上（2022 年級群以上）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並～上回る。宿毛湾、土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域西部では前年を上回る。紀伊水道外域東部では前年並。熊野灘では前年を下回る。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚 体：北薩及び薩南では、12 cm～16 cm（0 歳魚）主体。日向灘～豊後水道南部西側では、12 cm～18 cm（0 歳魚、1 歳魚）主体。豊後水道中南部東側では、12 cm～16 cm（0 歳魚）主体。宿毛湾～紀伊水道外域では 0 歳魚および 1 歳以上が漁獲される。熊野灘では 11 cm～17 cm（0 歳魚）主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚 体：10 cm～15 cm（0 歳魚）主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を大きく下回る。

(2) 漁期・漁場：まき網は 8 月当初は三陸北部海域が主漁場となる。その後、10 月まで房総～道東海域は小規模な漁場形成となる。11 月、12 月は三陸～常磐海域において漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲され、12 月以降に本格化する。

(3) 魚 体：14 cm 以下の 0 歳魚、13 cm～16 cm の 1 歳魚、15 cm～18 cm の 2 歳魚、16 cm～20 cm の 3 歳魚、17 cm 以上の 4 歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2026 年 4 月～2026 年 6 月）および見通し（2026 年 8 月～12 月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980 年代は 1,000 万トン以上の高い水準で推移したが、1990 年代に入って急減し、2002 年以降 2009 年まで 10 万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2020 年には 500 万トンを上回った。しかしその後、加入量は減少傾向にあり、2024 年の資源量は 399 万トンと推定された（2025 年度資源評価）。

2022 年級群（4 歳魚）以上は、最近 10 年（以下、近年）において高い加入量の年級群で構成されている。2025 年における 3 歳魚としての漁獲状況は、前年を上回った。2022 年級群の推定残存資源量は、2021 年級群の同時期を下回っている。

2023 年級群（3 歳魚）は、加入量が 332 億尾と推定されており、2022 年級群を下回る水準となっている。2025 年における 2 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2023 年級群の推定残存資源量は、2022 年級群の同時期を下回っている。

2024 年級群（2 歳魚）は、加入量が 564 億尾と推定されており、2023 年級群を上回る水準となっている。2025 年における 1 歳魚としての漁獲状況は、前年並であった。2024 年級群の推定残存資源量は、2023 年級群の同時期を上回っている。

2025 年級群（1 歳魚）は、2025 年における 0 歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を上回った。沖合域においては、5 月、6 月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）、5 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）、および 9 月、10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）において前年を下回る CPUE（Catch Per Unit Effort：単位努力量当たり漁獲量）が見られた。現時点では不確実であるが、近年は沖合加入群が資源の主体となっていることを踏まえ、2025 年級群の加入量は前年を下回る水準と考えられる。

2026 年級群（0 歳魚）に対応する 2026 年の産卵量は、99 兆粒（2026 年 6 月までの暫定値）であり、2025 年（697 兆粒）を下回った。マシラスとしての漁獲は、伊勢・三河湾では前年並、駿河湾においては前年を下回った。また、西日本の海域における未成魚としての漁獲は前年を上回っている。一方で、沖合域の調査（5 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査）では、前年を下回る漁獲が見られている。これらの情報から現時点では不確実であるが、近年は沖合加入群が資源の主体となっていることを踏まえ、2026 年級群の加入量は、低調であった前年を下回ると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での 2026 年 4 月～6 月（以下、前期）の漁獲量は 2.5 万トンと前年同期（1.0 万トン）を上回った。豊後水道中部海域及び紀伊水道外域西部では前年を下回る漁獲となったが、その他の海域では前年を上回る漁獲となった（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）。

・来遊量：北薩～薩南海域では、0 歳魚（2026 年級群）が漁獲の主体となる。1 月～6 月の 1 歳魚（2025 年級群）、2 歳魚（2024 年級群）の水揚量は前年と同水準であり、0 歳魚の漁況から加入は良好であると考えられる。それらを踏まえると、今期の来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、0 歳魚、1 歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲量は前年を上回っており、0 歳魚の加入も見込まれる。加えて、近隣県においても 0 歳魚の来遊が見られることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚、1 歳魚が漁獲の主体となる。0 歳魚が漁獲の主体であった前期のまき網水揚量が前年同期を上回ったことから、今期の来遊量は好調であった前年並と予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況が前年を大きく下回ったことから、今期の来遊量は前年を大きく下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0 歳魚および 1 歳以上が漁獲される。1 月～4 月のマイワシのシラス漁況から、0 歳魚の発生は前年を上回る水準であると考えられる。また、前期の宿毛湾における中型まき網の水揚量は前年を大幅に上回っていることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、定置網で 0 歳魚が混獲される。前期の漁況は前年並であったが、前年同期の来遊量が低調であったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、前期に 1 そうまき網での水揚げはなく、定置網、棒受網ともに漁獲量は前年を下回った。これらのことから、今期の来遊量は、低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、0 歳魚が漁獲の主体となる。2018 年以降、3 月～6 月における定置網の漁獲量と、8 月～11 月のまき網の漁獲量には正の関係が見られる。定置網での 0 歳魚の漁獲が前年を大幅に下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：北薩及び薩南では、12 cm～16 cmの0歳魚が主体となる。日向灘～豊後水道南部西側では、12 cm～18 cmの0歳魚、1歳魚が主体となる。豊後水道中南部東側では、12 cm～16 cmの0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では0歳魚および1歳以上が漁獲される。熊野灘では11 cm～17 cmの0歳魚が主体となる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での前期の漁獲量は192トンと前年同期（1,515トン）を大きく下回った。

- ・来遊量：伊勢・三河湾では、0歳魚が漁獲の主体となる。マシラスは4月中旬から5月中旬まで漁獲されたが、シラス全体に占めるその割合は低かった。また、7月の伊勢湾の漁獲状況から、前年と同様に今期も来遊は1群のみで構成され、追加の加入群は期待できないと考えられる。このことから、今期の来遊量は、前年を下回ると予測される。

駿河湾・相模湾西部では、0歳魚が漁獲主体となる。近年の傾向では、5月、6月に漁獲された0歳魚が8月～12月の漁獲の主体となる。その水揚量は前年を下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

相模湾東部では、0歳魚が漁獲の主体となる。近年の漁獲傾向から、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：主体となる0歳魚は10 cm～15 cm前後。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総以北のまき網での前期の漁獲量は0.6万トンであり、前年同期（10.1万トン）を大きく下回った。房総以北の定置網等での前期の漁獲量は0.2万トンであり、前年同期（2.8万トン）を大きく下回った。

- ・来遊量：各年級群の資源状態と前年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）を主体に、3歳魚（2023年級群）以上および0歳魚（2026年級群）が混じる。

2026年1月～6月は房総～道東までの各海域で漁獲が極めて低調に推移し、前年を大きく下回った。道東海域では、7月に入っても漁獲がない状態が続いている。

漁獲状況を考慮すると、主な漁獲対象となる2歳以上の来遊量は前年を下回ると予測される。1歳魚は、沖合域での調査結果から加入量が前年を下回ると考えられ、来遊量も前年を下回ると予測される。0歳魚は、主な漁獲対象とはならないものの、沖合域の調査結果から加入量は前年を下回ると考えられる。以上より、全体としての来遊量は前年を大きく下回ると予測される。

- ・漁期・漁場：まき網は、8月当初は三陸北部海域が主漁場となる。その後、房総～道東海域では小規模で散発的な漁場形成にとどまる。例年では、10月まで道東海域が主漁場となるが、漁況を考慮すると今期主漁場となるかは不透明である。11月、12月は、三陸～常磐海域において散発的に漁獲される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲され、12月以降に本格化する。

- ・魚体：0歳魚は8 cm～14 cm前後、1歳魚は13 cm～16 cm前後、2歳魚は15 cm～18 cm前後、3歳魚は16 cm～20 cm前後、4歳以上は17 cm以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～土佐湾、紀伊水道外域東部、鹿島灘～常磐南部海域では予測が困難。紀伊水道外域西部では低調であった前年を上回る。伊勢湾、渥美外海では前年を下回る。遠州灘～駿河湾では8月は前年を上回る、9月以降は予測困難。相模湾では前年並。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域では前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並～下回る。豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では低調であった前年並。紀伊水道外域西部では漁獲の無かった前年を上回る。紀伊水道外域東部、熊野灘では主たる漁獲対象ではない。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚 体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm以上の1歳以上が漁獲される。

3. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：低調であった前年並。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚 体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域～三陸南部海域および道東海域では前年を上回る。三陸北部海域では前年並。

(2) 漁期・漁場：房総海域（犬吠埼沖～外房海域）ではまき網（主に2そうまき）、仙台湾～三陸南部海域では定置網により期を通じて漁獲される。三陸北部海域（八戸沖）では2そうまきにより9月以降に漁獲される。房総～常磐海域および道東海域では1そうまきの漁獲対象となる可能性がある。

(3) 魚 体：5 cm～11 cm前後の0歳魚、9 cm～13 cmの1歳魚が主に漁獲され、11 cm～14 cmの2歳魚が混ざる。

漁況の経過（2026年4月～6月）および見通し（2026年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2002年の291万トンピークに減少傾向へ転じ、2018年には9.3万トンまで減少した。その後は増加傾向に転じ、2024年には29.9万トンと推定された（2025年度資源評価）。資源動向は、最近5カ年の親魚量の推移から増加傾向と判断されている。本系群は漁場が形成される沿岸域を中心に、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2025 年度資源評価に基づく、2024 年級群（2 歳魚）の加入量は 419 億尾と推定され、2023 年級群の加入量を上回った。しかし、本系群では近年、2 歳魚が資源全体に占める割合は極めて低い。このため、加入量は比較的良好であったものの、2 歳魚としての残存資源量は多くないと推測される。ただし、2 歳魚としての漁獲状況は現時点で前年を上回っている。

2025 年級群（1 歳魚）は、2025 年度資源評価では加入量が推定されていない。カタクチイワシシラス（以下、カタクチシラス）および 0 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。一方、1 歳魚としての漁獲状況は 2026 年 6 月時点ですでに前年を上回っている。また、水産資源研究所が実施した沖合域における 2026 年 5 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以下、北上期調査）では、体長 10 cm 以上魚（推定 1 歳以上）の CPUE（単位努力量当たりの漁獲尾数。全測点平均の暫定値）は前年並で、引き続き低水準であった。各情報は必ずしも一致した傾向を示していないが、本系群は沿岸域を中心に分布することから、直近の 1 歳魚としての漁獲状況（沿岸域）を踏まえると、不確実ではあるが 2025 年級群の 1 歳魚としての残存資源量は 2024 年級群を上回る水準であると推測される。

2026 年級群（0 歳魚）は、2025 年度資源評価では加入量が推定されていない。卵・稚仔、プランクトン調査（以下、卵稚仔調査）による 2026 年 1 月～6 月の産卵量（緯経度 30 分升目単位、I～IV 区の合計）は 4,557 兆粒であり、前年同期の 2,934 兆粒を上回った。主要港における 2026 年 1 月～6 月のカタクチシラスの水揚量も前年同期を大きく上回った。また、北上期調査における体長 10 cm 未満魚（推定 0 歳魚）の CPUE 暫定値は前年を大きく上回り、2010 年代前半と同程度となった。以上のことから、不確実性は大きいものの、2026 年級群の加入量は 2025 年級群を上回る水準であると推測される。なお、本系群は産卵期が長く、7 月以降にもまとまった加入が見られる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～土佐湾および紀伊水道外域東部では、シラスの来遊量については予測が困難である。紀伊水道外域西部では、夏～秋シラスは、瀬戸内海で産卵・ふ化し、潮流によって来遊したカタクチシラスが主体となる。大阪府が 2026 年 7 月に実施した卵稚仔調査では、大阪湾において採集卵数は前年を上回って平年並（平年は過去 5 年平均）、稚仔は前年および平年を上回った。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

伊勢湾、渥美外海では、8 月以降は、外海からの来遊に加え、内湾域での漁場形成が期待される。2026 年 1 月～6 月のシラス漁獲量は低調であった前年および平年（過去 10 年平均）を上回った。一方、6 月に伊勢湾内で実施した卵稚仔調査では卵稚仔が少なく、また、ぱっち網による操業では小型魚（未成魚）が多いことから、内湾域での産卵は少ない可能性がある。しかし、外海では卵稚仔が多く、親魚資源は良好と考えられるため、遠州灘沖から暖水が波及すれば外海での漁場形成が期待される。ただし、春にシラスの漁獲量が多かった年は、夏以降の漁獲量が少ない傾向があるとともに、前年 8 月～12 月の漁獲量は平年を上回り、特に 12 月は過去最高となった。以上のことから、今期の来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

遠州灘～駿河湾では、潮岬～遠州灘西部（伊勢・三河湾内を除く）における 5 月～6 月のカタクチイワ

シ産卵量（卵稚仔調査結果）と静岡県主要 6 港における 8 月のシラス水揚量との間に正の関係が認められる。2026 年 5 月のカタクチイワシ産卵量は 1.4 兆粒であり、この値を関係式に代入すると、8 月のシラス水揚量は 248 トンと推定される。この推定には 6 月の産卵量が含まれていないものの、推定値は前年の 172.5 トンおよび平年（過去 5 年平均）の 200.3 トンを上回る。このことから、今期序盤（8 月）の来遊量は前年を上回ると予測される。9 月以降については、現時点で予測の根拠となる情報が得られていないため、来遊量の予測は困難である。

相模湾では、2026 年 1 月～6 月に相模湾および東京湾口で実施した卵稚仔調査において、カタクチイワシ卵の平均採集量は 201.7 粒となり、前年の 124.7 粒および平年（過去 5 年平均）の 69.1 粒を上回った。2026 年 3 月～6 月のシラス漁獲量も卵の平均採集量と同様に増加したものの、カタクチイワシの漁獲量は減少傾向にあり、今後上向くかは不透明である。以上のことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、現在、茨城県沿岸への黒潮続流からの暖水波及が弱まり、北方から冷水が差し込んでいる。しかし、8 月の海面水温は概ね平年並～やや高めで推移する見込みとなっている。また、茨城県沿岸では 6 月、7 月にカタクチイワシ卵が多く採集され、その数は過去 3 年を上回った。冷水の影響下でも海面水温は大きく低下しないと見込まれ、卵の供給も続いていることから、今期序盤の来遊量は前年を上回ると予測される。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

- ・来遊量：北薩、薩南海域では、カタクチイワシとシラスの水揚げが低迷しており、今期の漁獲主体となる 0 歳魚（2026 年級群）について来遊量が増加する兆候は見られない。このことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

日向灘では、近年、大羽群の漁獲はほとんどなく、今期も沿岸発生群が漁獲の主体になると考えられる。2026 年 4 月～6 月の漁獲量は前年を下回っており、近隣県の来遊状況を踏まえても、今後の来遊増加は期待しにくい。これらのことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚が水揚げの主体であった 2026 年 4 月～6 月の水揚量は前年同期を下回った。予測期間の前半にはマイワシやウルメイワシに混じって漁獲され、カタクチイワシの来遊量が水揚量に十分反映されない可能性もある。以上のことから、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

豊後水道東側では、期を通じて 0 歳魚が漁獲の主体となる。2026 年 1 月～6 月はまき網によるカタクチイワシの水揚げが前年同期を大幅に上回った。以上のことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、期を通じて 0 歳魚、1 歳魚（2025 年級群）以上が漁獲される。2026 年 4 月～6 月の中型まき網および定置網による水揚量は、前年および平年（2015 年～2024 年の 10 年平均）を下回った。このことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、定置網において 0 歳魚が混獲される。2026 年 3 月～6 月の漁況は低調であったが、前年 8 月～12 月にはカタクチイワシの漁獲がなかった。このことから、今期の来遊量は前年を上回

ると予測される。

紀伊水道外域東部では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、来遊量の予測は困難である。

熊野灘では、夏秋季にまとまった漁獲はほとんどなく、マイワシなどに混じって漁獲されることが多い。今期も例年と同様に、まとまった来遊はないと予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm 以下の0歳魚主体に、10 cm 以上の1歳以上が漁獲される。

(3) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾では、2026年4月～5月に伊勢湾内でシラスの漁獲量が多く、7月の操業では体長5 cm～7 cmの個体が漁獲されている。一方、6月以降はシラス漁場が形成されていないため、例年秋以降に漁獲される体長5 cm～6 cmのカタクチイワシは期待できない。予測期間中に外海から成魚が来遊すれば漁獲量増加につながるが、基本的には0歳魚（2026年級群）が主体になると考えられる。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾西部では、例年、8月以降の定置網への入網はわずかであり、近年もほとんど水揚げがない状況が続いている。また、近年は資源量も少ない。定量的な予測は難しいものの、こうした近年の状況を踏まえると、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、2018年以降、主要定置網における8月～12月の漁獲量は数トン程度にとどまっている。また、JCOPE3Mによる黒潮長期予測（7月8日発表）では、八丈島を中心に南北に流れる離岸流路になると予測されており、近年の不漁傾向が継続すると考えられる。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm 以下の0歳魚主体に、10 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、予測期間中に漁獲される0歳魚（2026年級群）は、主に7月を中心に遠州灘～熊野灘海域（静岡県～三重県の外湾）で発生する加入群に由来すると考えられているが、現時点で当該加入群に関する情報が得られていない。一方、静岡県および三重県における6月以降の成魚の漁獲状況は前年を上回っており、7月以降の産卵への寄与が期待される。なお、2025年の房総周辺海域における0歳魚の漁獲量は2005年以降で最低水準であった。1歳魚（2025年級群）は、近年はその大部分が予測期間序盤には北上し、中盤以降は徐々に漁獲されなくなる傾向にある。2025年12月～2026年6月の水揚げ尾数が前年を大きく上回ったことから、来遊量も前年を上回った可能性があり、今期序盤の北上過程における来遊量も前年を上回ると推測される。一方、2歳魚（2024年級群）以上の来遊量は、引き続き少ないと推測される。以上のことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

常磐海域では、北部太平洋まき網漁業協同組合連合会が集計した2026年1月～6月のセグロの陸揚量は、前年同期の約4.6倍に増加した。ただし、1そうまきは、周年にわたりサバ類、マイワシおよびアジ類を主な対象とし、これらが見つからない場合にカタクチイワシを漁獲する操業形態となっている。カタ

クチイワシ狙いの操業が行われるかは不確実であるが、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

仙台湾～三陸南部海域では、今期の黒潮続流はやや北偏し、水温は平年よりやや高く推移するため（FRA-ROMS II）、カタクチイワシが滞留しやすい環境になると推測される。また、2026年3月～6月の水揚げ実績は前年同期を大きく上回っており、8月以降も前年を上回る水揚げが続く可能性が高い。さらに、12月以降に来遊する南下群についても、高い来遊が期待される。以上のことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

三陸北部海域では、八戸沖で10月～11月に主にまき網により漁獲され、定置網では混獲程度となる。近年の資源状態および漁獲動向を踏まえると、今期の来遊量は前年並と予測される。

道東海域では、釧路水産試験場が9月および10月に道東太平洋海域で実施している調査船調査において、カタクチイワシのCPUEはここ数年増加傾向にある。また、2026年6月の調査では、マイワシやサバ類が漁獲されなかった一方、カタクチイワシが272個体漁獲された。これらのことから、道東太平洋海域へのカタクチイワシの来遊量は増加傾向にあると推測される。よって、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

・漁期・漁場：房総海域（犬吠埼沖～外房海域）ではまき網（主に2そうまき）、仙台湾～三陸南部海域では定置網により期を通じて漁獲される。三陸北部海域の2そうまきでは9月以降に漁獲される。房総～常磐海域および道東海域の1そうまきでは漁獲の対象となる可能性がある。

・魚体：5 cm～11 cm前後の0歳魚、9 cm～13 cmの1歳魚が主に漁獲され、11 cm～14 cmの2歳魚が混ざる。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026 年 8 月～12 月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0 歳魚（2026 年級群）、1 歳魚（2025 年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩・薩南海域では前年を上回る。日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を下回り、豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁 期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚 体：0 歳魚（8 cm～20 cm）が主体となる。海域により 1 歳以上（20 cm 以上）も対象となる。

漁況の経過（2026 年 1 月～6 月）および見通し（2026 年 8 月～12 月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015 年に 4.9 万トンと過去最高となったが、2016 年以降の漁獲量は減少傾向に転じ、2018 年以降は概ね 3 万トン以下であった。2025 年の漁獲量暫定値は 2.1 万トンであった。余剰生産モデルにより算出された資源量指標値（平均値を 1 とする相対値）は、1979 年以降緩やかに増加して 1997 年に 0.95 を示し、その後減少して 2002 年に 0.71 となった。2003 年以降は再び増加し、2015 年に過去最高となる 1.77 を示した。2016 年以降は減少傾向が継続しており、2024 年は 0.95 となった。これらのことから、2025 年度資源評価において、減少傾向にあると判断されている。

2025 年の資源量指標値は未推定であるが、資源量指標値の算出に用いた太平洋および瀬戸内海（海区Ⅰ～海区Ⅲ、海区Ⅶ）の産卵量（前年 9 月～当年 8 月を 1 年とする）は、2016 年～2025 年にかけて減少傾向を示しながら 31 兆粒～205 兆粒の間で推移している。2025 年 9 月～2026 年 6 月の産卵量は 50 兆粒であった。過去最低の産卵量となった前年同期（2024 年 9 月～2025 年 6 月、27 兆粒）を上回ったものの、親魚資源は依然低い水準にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

例年の傾向から、2026 年後期（8 月～12 月）の漁況は 0 歳魚（2026 年級群）が主体になると推測される。予測対象海域（鹿児島県～三重県）の主要港における前期（1 月～6 月）漁獲量と後期漁獲量には正の関係がある。2026 年前期の漁獲量は 7.6 千トンであり、低調であった前年同期（3.2 千トン）を上回った。2000 年～2025 年の前期漁獲量と後期漁獲量との関係を用いて、2026 年前期の漁獲量から 2026 年後期の漁獲量を予測すると 15.7 千トンとなる。この値は 2025 年後期の漁獲量 18.4 千トン並である。ただし、近年の実測値は予測値を上回る傾向がみられている。

北薩～薩南海域では、0 歳魚、1 歳魚（10 cm～21 cm）が漁獲対象となる。4 月～6 月のまき網における

漁獲動向から来遊水準は前年を上回ると予測される。

日向灘では、0 歳魚、1 歳魚（13 cm～22 cm）が主体となる。4 月～6 月の漁獲動向から 0 歳魚の加入は前年と同程度と見込まれるため、来遊水準は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、8 月～10 月は 0 歳魚（10 cm～20 cm）が主体となる。4 月～6 月のまき網漁獲量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では 0 歳魚が主体となる。加入時期にあたる 4 月～6 月の漁獲動向から、来遊水準は前年を上回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0 歳魚、1 歳魚が漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期漁獲量と 7 月～12 月の漁獲量との間には正の関係が認められ、この関係から来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、0 歳魚主体に混獲される。近年の漁況は安定していることから、来遊水準は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、1 そうまき網による漁獲は近年殆ど無い。4 月～6 月の棒受網の漁獲量は前年並となった。これらのことから、8 月～12 月の来遊水準は前年並と予測される。

熊野灘では 0 歳魚（8 cm～20 cm）が主体となり 1 歳以上（18 cm～23 cm）も漁獲される。5 月～6 月の定置網と 8 月～11 月のまき網の漁獲量には正の関係が認められる。この関係から、来遊水準は前年を上回ると予測される。なお、熊野灘のまき網では漁獲優先順位は高くないが、ここ数年の記録的な不漁状況下では本種に対する狙い操業が増加し、漁獲圧が高まる可能性がある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、
2歳魚（2024年級群）、3歳（2023年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年並。豊後水道西側では前年並～下回る。豊後水道東側および宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。
- (2) 魚 体：北薩～薩南海域および日向灘では0歳魚、1歳魚主体。豊後水道では0歳魚が主体。宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳以上は23 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：紀伊水道外域西部では前年を下回る。紀伊水道外域東部では前年並。熊野灘では前年並～上回る。
- (2) 魚 体：紀伊水道外域では0歳魚、1歳魚主体。熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚は23 cm～27 cm、3歳以上は25 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

- (1) 来遊量：伊豆東岸および西湘地区では前年を下回る。
- (2) 魚 体：主体となる0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～22 cm。

漁況の経過（2026年1月～6月）および見通し（2026年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.8億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和7年度（2025年度）資源評価において、2024年の資源量は5.7万トン、親魚量は2.2万トンと推定された。

3歳魚（2023年級群）の加入量は7.1億尾と推定された。1月～6月の3歳魚の漁獲は前年を上回った。残存資源量は少ないと考えられる。2歳魚（2024年級群）の加入量は、2023年級群と同程度であり、7.1億尾と推定された。1月～6月の2歳魚の漁獲は前年を上回った。1歳魚（2025年級群）の加入量を推定することは難しい。1月～6月の漁獲は前年を上回った。各県地先の6月までの加入量指標値（宮崎南部定置網 CPUE、宇和島まき網 CPUE、宿毛湾まき網 CPUE、串本棒受網漁獲量、伊勢湾豆板漁業 CPUE）の相乗平均値は、2024年級群と同程度であった。0歳魚（2026年級群）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点で加入量を推定することは難しい。1月～6月の漁獲は前年を下回った。各県地先の加入量指標値の相乗平均

値は、2025 年級群より、大きく減少した。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期（2026 年 1 月～6 月）の漁況に基づき予測した。年齢別尾叉長は、これまでの尾叉長組成の推移から概ね次のとおりである。0 歳魚（2026 年級群）：19 cm 以下、1 歳魚（2025 年級群）：19 cm～25 cm、2 歳魚（2024 年級群）：23 cm～27 cm、3 歳（2023 年級群）以上：25 cm 以上。3 歳以上の年齢に対応した尾叉長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では 20 cm 台に 3 歳～10 歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0 歳魚（2026 年級群）、1 歳魚（2025 年級群）、2 歳魚（2024 年級群）が漁獲の主体となる。4 月～6 月のまき網漁業における漁獲動向から、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、1 歳魚、2 歳魚が漁獲の主体となる。4 月～6 月の漁獲量は前年並であり、低調な漁獲が続いていることから、8 月～12 月の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道西側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。2025 年級群のまき網での水揚量は前年を下回ったことから、8 月～12 月の来遊量は前年並～下回ると予測される。

豊後水道東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。5 月～6 月と 8 月～12 月において、両期間の当歳魚の水揚量には正の関係が認められる。この関係から、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0 歳魚と 1 歳魚（が主体となる。宿毛湾中型まき網における上半期の水揚量と下半期の水揚量には有意な正の関係が認められる。この関係から、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0 歳魚（2026 年級群）が主体となり、1 月～6 月の漁況は低調であったことから、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1 歳魚（2025 年級群）が漁獲の主体となる。7 月～11 月の漁獲量は同年 1 月～6 月の漁獲量と一定の関係性が認められ、その関係から、8 月～12 月の来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では、1 歳魚が主体で、0 歳魚および 2 歳魚（2024 年級群）以上も漁獲される。1 歳魚は前期のまき網での漁獲主体として前年並の漁獲量があったこと、0 歳魚は前期の定置網において前年を大幅に上回る漁獲があったことから、8 月～12 月の来遊量は前年並～上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、0 歳魚（2026 年級群）が漁獲の主体となる。月別体長組成と漁獲量から推定した 1 月～6 月の 0 歳魚の漁獲尾数と 7 月～12 月の 0 歳魚の漁獲尾数の関係から、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

西湘地区では、0 歳魚と 1 歳魚（2025 年級群）が漁獲の主体となる。2000 年～2025 年の漁獲量データより、上半期のジンダ銘柄漁獲量と下半期のマアジ総漁獲量には一定の関係性が認められる。この関係から 8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。

（4）房総～三陸海域等の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の 2026 年 1 月～6 月の漁獲量は 310 トン（TAC システム）と、前年同期 10 トンを大きく上回った。主な狙いの対象とならないため、8 月～12 月の来遊量の予測は難しい。常磐海域では、底曳網で 2026 年 1 月～6 月の漁獲量は 30 トンであり、8 月～12 月も平年通りで推移すると予測される。仙台湾～三陸南部海域では、宮城県の 2026 年 1 月～6 月の漁獲量は 45 トンで前年を下回った。今期の宮城県沿岸の水温は前年を下回り、5 月～6 月の来遊量も前年を下回っていることから、8 月～12 月の来遊量は前年を下回ると予測される。三陸北部海域では、岩手県の 2026 年 1 月～6 月の定置網による漁獲量は 15 トンで前年を上回った。青森県の 2026 年 1 月～6 月の漁獲量は 32 トンで前年を上回り、定置網では近年の漁獲動向から 8 月～12 月の来遊量は前年並～上回ると予測される。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、底曳網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、
3歳魚（2023年級群）、4歳魚（2022年級群）、5歳魚（2021年級群）、
6歳（2020年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）
 - (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては前年並～下回る。
 - (2) 漁 期：期を通じて漁獲される。
 - (3) 魚 体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、北薩～薩南海域、日向灘では20 cm～36 cm（0歳魚～3歳魚）主体、豊後水道南部では20 cm～30 cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では30 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。
2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）
 - (1) 来遊量：サバ類全体としては前年を下回る。
 - (2) 漁 期：期を通じて漁獲される。
 - (3) 魚 体：マサバは、25 cm～34 cm（1歳魚、2歳魚）主体に15 cm～25 cm（0歳魚）も漁獲される。
3. 熊野灘（まき網、定置網）
 - (1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。
 - (2) 漁 期：期を通じて漁獲される。
 - (3) 魚 体：マサバ、ゴマサバともに15 cm～25 cm（0歳魚）主体に、30 cm～35 cm（1歳魚～3歳魚）も漁獲される。
4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）
 - (1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。
 - (2) 漁期・漁場：伊豆諸島北部海域を中心に、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。
 - (3) 魚 体：ゴマサバは29 cm～38 cm（2歳魚、3歳魚）主体に漁獲される。
5. 犬吠埼沖～三陸海域、道東海域（まき網、定置網、底曳網）
 - (1) 来遊量：マサバはまき網では前年並～下回り、定置網、底曳網では前年を下回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低水準。
 - (2) 漁期・漁場：定置網では期を通じて、底曳網では9月以降に漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東～三陸南部海域、11月、12月は三陸北部海域～犬吠埼沖に主に形成される。
 - (3) 魚 体：マサバは20 cm～33 cm（1歳魚、2歳魚）主体に、27 cm～35 cm（3歳魚～5歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2026年1月～6月）および見通し（2026年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年の高い加入量により2013年に急増した。その後、2018年の高い加入量により資源量は2019年まで横ばい傾向を示したが、2020年以降は減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2020 年級群（6 歳魚）は、2025 年 12 月時点の資源評価（状態空間資源評価モデル（SAM））による推定加入量が 80 億尾と近年（2015 年～2024 年）の平均（72 億尾）程度の水準である。

2021 年級群（5 歳魚）は、推定加入量が 81 億尾と近年の平均程度の水準である。

2022 年級群（4 歳魚）は、推定加入量が 72 億尾と近年の平均程度の水準である。

2023 年級群（3 歳魚）は、推定加入量が 31 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2024 年級群（2 歳魚）は、推定加入量が 30 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2025 年級群（1 歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6 月～7 月）および再生産関係から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

2026 年級群（0 歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、2026 年北西太平洋北上期浮魚類資源調査における平均 CPUE は近年の平均値よりかなり低い値を示したことから、近年の平均を大きく下回る水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は 2004 年～2011 年に高い水準にあったが、2011 年以降、減少傾向を示し、2023 年の資源量は、資源量を推定している 1995 年以降で最低水準となっている。

2021 年級群（5 歳魚）は、2025 年 12 月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が 4.1 億尾と近年の平均（4.3 億尾）程度の水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2022 年級群（4 歳魚）は、推定加入量が 5.3 億尾と近年の平均を上回る水準である。

2023 年級群（3 歳魚）は、推定加入量が 4.9 億尾と近年の平均程度の水準である。

2024 年級群（2 歳魚）は、推定加入量が 3.1 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2025 年級群（1 歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均程度の水準と推定されている。

2026 年級群（0 歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、直近の漁獲状況から近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0 歳魚（2026 年級群）は、調査船調査の結果から加入量が近年の平均を大きく下回る水準と考えられ、来遊量は低調であった前年を下回る。1 歳魚（2025 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年並。2 歳魚（2024 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並。3 歳魚（2023 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4 歳魚（2022 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。5 歳魚（2021 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。6 歳（2020 年級群）以上の来遊量は前年を下回る。全体の来遊量は前年並～下回り低水準となる。資源評価では 2020 年以降は資源量が減少傾向にあると推定されており、マサバの来遊量は、道東海域、三陸海域～犬吠埼沖のまき網では低調であった前年並～下回る。三陸海域の定置網、底曳網では前年を下回る。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁獲量は、犬吠埼以北海域のまき網は 11.6 千トン（前年同期実績 0.8 千トン）、犬吠埼以北海域の定置網、底曳網等は 1.0 千トン（同 7.5 千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は 0 トン（同 1.8 百トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は 0.1 千トン（同 1.4 千トン）、紀伊水道外域～北薩海域の全漁業では 1.9 千トン（同 3.0 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の魚体は次のとおりであった。犬吠埼以北海域のまき網では、19 cm～25 cmの1歳魚、2歳魚主体に28 cm～33 cmの3歳魚、4歳魚も漁獲された。三陸海域の定置網、底曳網では、29 cm～37 cmの3歳魚～5歳魚主体に、19 cm～25 cmの1歳魚、2歳魚も漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域ではほとんど漁獲されなかった。駿河湾～北薩海域では、22 cm～32 cmの1歳魚、2歳魚主体に漁獲された。

本予測期間は、犬吠埼以北海域のまき網、定置網、底曳網での漁獲が中心となり、1歳魚、2歳魚主体に3歳以上も漁獲される。水産資源研究所海洋環境部の「2026年度東北近海の8～10月のマサバ漁場予測」によると、本年の夏季～秋季は三陸南部海域がマサバの主漁場となりやすい水温環境であることから、まき網漁場は8月～10月は道東～三陸南部海域に、11月、12月は三陸北部海域～犬吠埼沖に形成される。三陸海域の定置網では期を通じて、底曳網では9月以降に断続的に漁獲される。

伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘では0歳魚主体、紀伊水道外域では1歳魚、2歳魚主体、豊後水道南部、日向灘では0歳魚、1歳魚主体に、散発的な漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠埼以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚：20 cm～30 cm前後、2歳魚：22 cm～33 cm前後、3歳魚：24 cm～37 cm前後、4歳魚：27 cm～39 cm前後、5歳魚：32 cm～40 cm前後、6歳以上：34 cm以上。0歳魚は伊豆諸島以西で主に漁獲され、例年の傾向から15 cm～25 cm前後と予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2026年級群）は、直近までの漁況を考慮すると加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。1歳魚（2025年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。2歳魚（2024年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均程度水準であり、来遊量は前年並となる。4歳（2022年級群）以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では前年を下回り、日向灘、豊後水道南部西側では低調であった前年並、豊後水道南部東側では前年を下回り、土佐湾では低調であった前年を上回り、紀伊水道外域では低調であった前年並、熊野灘、伊豆諸島周辺海域では低水準、犬吠埼以北海域では混獲される程度にとどまり、全体としては低調であった前年並～下回る来遊量となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は6.2千トン（前年同期実績5.3千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は1.2千トン（同4.4千トン）、犬吠埼以北海域は0.9千トン（同0.8千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では2歳魚～4歳魚、日向灘では0歳魚、豊後水道南部では1歳以上、熊野灘では1歳魚、2歳魚、伊豆諸島周辺海域では2歳魚～4歳魚、犬吠埼沖～三陸海域では1歳魚～5歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域、日向灘では0歳魚～3歳魚主体、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、熊野灘では0歳魚主体に、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域で操業が行われる場合は、伊豆諸島北部海域を中心に2歳魚、3歳魚主体に漁場が形成されるが、黒潮流路によっては三宅島周辺海域、銭洲海域が漁場となる。犬吠埼以北海域のまき網、底曳網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0 歳魚：20 cm～25 cm 前後、1 歳魚：25 cm～32 cm 前後、2 歳魚：28 cm～35 cm 前後、3 歳魚：30 cm～37 cm 前後、4 歳以上：33 cm 以上。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	